

ロシア手話考 (1)

ーロシア手話・指文字・触指法・手文字の概観ー

宮 井 清 香	千 明 弘 美	広 瀬 信 雄
(山梨大学大学院)	(八田小学校)	(障害児教育講座)

I. はじめに

わが国ではあまり知られていないが、ロシア（ソビエト時代を含む）のろう教育は、早くから教育方法が開発されていた。ドイツ、フランスのろう教育の影響を受け、早くから口話法と手話法を取り入れてきたロシアのろう教育は、20世紀後半になってアメリカのトータルコミュニケーションの誕生に刺激を与えている。

小論では、現代ロシアのろう教育に焦点を合わせ、これまで日本では紹介されてこなかった、そこで用いられているロシア式指文字、手話について明らかにし、ろう教育方法の特徴づけを行う前段階的な作業の一つとしたい。

II. ロシアろう教育における手話論

1. ロシアろう教育の成立

1860年、イワン・カルロヴィチ・アルノリド（1805－1891）は、モスクワに私立の小さなろう学校を開いた。彼自身、幼い頃に聴力を失い、ドイツで学んだ。ロシアに帰国後、まず彼はサンクト・ペテルブルクに学校をつくり、続いてモスクワに5人の生徒と共に学校を移した（1863年）。これが、現存しているロシアで最初の本格的なろう学校である。当時の慈善委員会や著名な美術館の創立者であるパーヴェル・ミハイロヴィチ・トレチャコフ（1832－1898）の支援を受け、1900年からこの学校は、「アルノリド・トレチャコフろう学校」と呼ばれる。1899年から1918年まで、校長を務めたのは、高名なろう教育者一家の父フョードル・アンドレーヴィチ・ラウである。その妻ナターリアは、1900年、ろう児のための幼稚園をモスクワに開いたが、これはヨーロッパで最初のろう児幼稚園である。

こうして、ロシアのろう教育のシステムが形成されてきた。1918年、ソビエト時代にも、この学校は国立のろう教育センターとしての役割を果たし（1941～1943年の間はペンザ市に疎開）、現在でも第101ろう学校として、ろう児幼稚園、並びに寄宿舎と併設している。

ロシアで最も歴史のあるろう学校を取り上げることによって、すべてを示すことには無理が生じるが、基本的なロシアろう教育の特徴づけを行う際、その役割に触れないわけにいかない。

とりわけソビエト時代、「欠陥学(障害学)」のペレストロイカがレフ・セミョーノヴィチ・ヴィゴツキー(1896-1934)を中心に行われ、理論的な整理と実践が行われたが、これらについては、先行研究を参照していただき、その役割と現代的な意味については機会を改めて述べることにし、ここでは概観にとどめたい。

2. ロシア語対応手話とロシア手話

一般に、「手話」には2つの意味が含まれる。一つは、耳の聞こえない人同士が用い、育んできたろう者同士が用いる、いわばネイティブ手話であり、これは独自の文法体系を持っている。これらはスピードが速く、ろう者間では便利であるが、聴者にはわからず、また聴者がマスターすることが困難といわれている。もう一つの手話は、「対応手話」といわれるもので、日本語の語順や文法に対応して手話が進行するものである。聴者が手話を学ぶとき、ほとんどがこの対応手話である。これは、手話を母語とするろう者にとっては、ゆっくりでスピードも遅く、便利とはいえないが、聴者とコミュニケーションをとる際には有効となる。何より、音声言語としての日本語と対応しているため、聴者が学びやすい。前者の「ネイティブ手話」と、後者の「対応手話」の間には、さまざまなバリエーションがあり、実際には混ざり合っているともいえる。

ロシア語とロシア手話の関係についても、同じことがいえる。ロシアのろう者は、2つの全く異なるシステムを用いて他者とのコミュニケーションを図る。まず、ロシア語対応手話—КЖР—は、話し手の話しことばの順序に身ぶりが対応して伴うコミュニケーションである。ロシア語対応手話での身ぶりは、単語と等価であり、その語順は通常の文章の単語順に一致する。口で発音しながら身ぶり表現を行う。ロシア語対応手話で表現される身ぶりは、基本形での表現である。独自の文法はなく、それぞれの元の言語構造(すなわち「ロシア語」)に対応している。

ロシア手話—РЖЯ—は、ロシアの身ぶり言語を用いて行われるコミュニケーションのシステムである。ロシア手話は独自の言語体系で、独自の修辞法と文法を持っている。ロシアのろう者が育んできた、いわばネイティブなロシア手話のことである。

3. 指文字と盲ろう者のためのロシア触指法

とりわけ、ロシアのろう教育において特徴的なのは、指文字の重視である。日本において手話によるコミュニケーションを考えた場合、指文字は補助的な手段であり、固有名詞や助詞をより明確にする際のキュー(補助的な合図)としての役割を担っているとされる。

しかし、アルファベットの文字数が限られる欧語族では、指文字が主要な手段となりうる。つまり指文字は「文字」であり、身ぶりとは異なり、綴ることによってあらゆる単語を示すことができる。ロシアのろう教育では、指文字が重視され、そのことがアメリカのロチェスター法に影響を与えた。トータルコミュニケーションへの動因となったのである。

ここで指文字は盲ろう二重障害の人々にとって非常に有効であることを加えて指摘した

い。ロシアでは「触指法」として盲ろう者用の指文字が区別されている。今回はその概要を示すにとどめたい。

触指法でのコミュニケーションは、文字に対応する特別な記号を指で作る。手で表現されたことばを理解するために、盲ろうの人々は、話し相手が指文字を作っている手に軽く触れ、何を話しかけているのかを理解する。ことばを読み取る際は、手のひらの表面全てで読み取る。触指法を学び始めたばかりの盲ろう者は、話し相手の指をむやみやたらに触り、文字を理解しようとする場合もある。触指法の読み取りについては、手の置き方や構え方にきまりがある。話す人が右手のときは、聞く人は左手で読み取らなければならない。読み取る際には、話し相手が表現する指文字に触れやすくするために、柔軟に対応できるようにしておく必要がある。話し相手も、接触を保つために相手の動きを追いかけることも必要である。

指文字を作る際には、指の位置が動いてしまったり、会話の流れがいい加減になったりしないように、はっきりと作らなければならない。また、お互いにリズムカルに記号を交替し、交替の時間の間隔が同じになるように触れることが大事である。

ロシアにおける触指法コミュニケーションは、手のひらの中で指をなめらかに動かして発信し、指先から手のひらの部分で発信される指文字を敏感に感じ取るという、メソッドとしての価値がある。ロシア以外の国では、触指法によるコミュニケーションは発展していないといっても過言ではない。ロシアの盲ろう教育は、触指法によって支えられてきたのである。

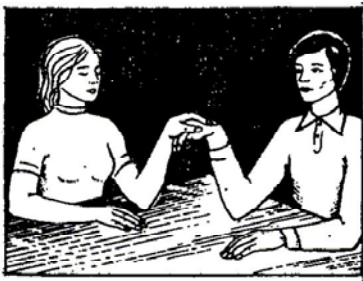


図1-1 基本ポジション

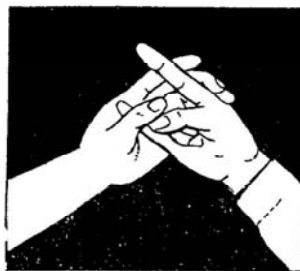


図1-2 文字B



図1-3 文字C

図1 盲ろう者のためのロシア手指法の例（文献13より転写）

Ⅲ. ロシア手話の概観

1. ろう学校で使用されている手話

ロシア語対応手話とロシア手話の両方に共通して利用されている手話の一部を紹介する。ろう学校の教師や寄宿舎指導員が必要と考える手話の一部を抜粋したものである。

各記号が示す意味について上から順に述べると、「動きの方向」「手前に出す動き」「手

前にひく動き」「指の小刻みな動き」「はじくような指の動き」「手話を行う際の手の最初の位置」「手話を行う際の手の終わりの位置」「繰り返しの動き」である。

各記号は、手話の仕組みをわかりやすくするための補助的役割がある。状況表示の記号は、以降で紹介する手話を理解するうえでの参考になるだろう。

以下に、対応手話、ロシア手話に共通する手話の例を文献1より転写し示す。なお訳語は筆者による。









Условные обозначения	
Направление движения	
Движение от себя	
Движение к себе	
Движение с перебором пальцев	
Щелчкообразное раскрытие пальцев	
Начальная позиция рук при исполнении жеста	
Конечная позиция рук при исполнении жеста	
Повторяющееся движение	

図2 ロシア手話における状況表示（文献1より転写）



図3 ロシア手話 (文献1より転写)

А	Б	В	Г	Д	Е	Ж
З	И	Й	К	Л	М	Н
О	П	Р	С	Т	У	Ф
Х	Ц	Ч	Ш	Щ	Ъ	Ы
Ь	Э	Ю	Я			

図4 ロシアの指文字（文献1より転写）

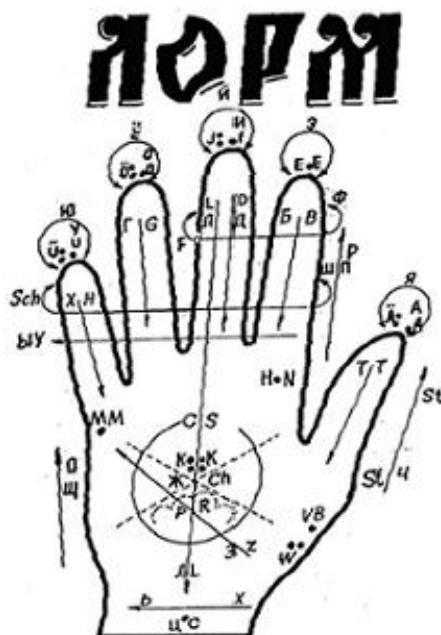


図5 ロシア語・ドイツ語併用手文字ロールム「LORM」
（文献13より転写）

Ⅳ. おわりに

これまでわが国ではほとんど知られていなかった、ロシアにおけるろう教育について、またロシア式指文字、手話について注目し、その概要を記した。当然のことながら、ロシアでも、ネイティブなロシア手話とロシア語対应手話との間にさまざまなバリエーションの手話が存在している。つまり、ロシア手話が、ろう者同士の有力な言語であるのは間違いないが、健聴者とろう者とのコミュニケーションに近年の注目が払われてきたため対应手話が生まれ、さらに学校教育では、双方に共通の手話が多用される。

とりわけ、中途失聴者や難聴者も、手話を習得すべきであるという主張は、この国においても、手話の位置づけが高くなったことを意味している。

さらに、言語に付随する身ぶりや表情について、ロシア語では、特にその役割を強調しておかねばならないだろう。聴覚障害研究の分野と特別関係なく、ロシア語に伴う表情やジェスチャーについては、すでに多くの指摘があり、「身ぶり事典」のようなものが刊行され、各地で「パントマイム」劇場が活動していることもよく知られている。表情やジェスチャーに対する国民的な愛着、伝統があるのだろう。ロシア手話研究において、以上のような文化論的視点からのアプローチもまた必要である。

小論で示した、さまざまなコミュニケーション手段は、一見ばらばらに使用されているように思われるかもしれないが、口話法と手話法の混在現象というよりも、指文字（盲ろ

う教育では触指法)に大きな意味を見出すことによって、ジェスチャー→対応手話→指文字→口話という変換の図式と読唇法や筆談まで含めて、状況や条件に応じてコミュニケーションの方法を使い分ける志向が背景に浮かび上がってくる。

以上のことが、ろう教育の実際の場合においてどのように教えられるのかを明らかにすることが今後の課題である。

文献

- 1) Зайцева Г.Л. (2000) Жествая речь Дактилология. Гуманитарный издательский центр ВЛАДОС.
- 2) Головчиц Л.А. (2001) Дошкольная Сурдопедагогика. Гуманитарный издательский центр ВЛАДОС.
- 3) Зыков С.А. (1977) Методика обучения глухих детей языку. просвещение.
- 4) Леонгард Э.И.・Самсонова Е.Г.・Иванова Е.А. (1990) Я не хочу молчать ! . просвещение.
- 5) Акишина А.А.・Кано Х.・Акишина Т.Е. (1991) Жесты и мимика в русской речи. Русский язык.
- 6) Узорова О.В.・Нефедова Е.А. (2002) Игры с пальчиками. Издательство Астрель.
- 7) Зыкова Т.С.・Зыкова М.А. (2002) Методика предметно-практического обучения в школе для глухих детей. Академия.
- 8) Янн П.А. (2003) Воспитание и обучение глухого ребенка сурдопедагогика как наука. Академия.
- 9) Назарова Л.П. (2001) Методика развития слухового восприятия у детей с нарушениями слуха. Гуманитарный издательский центр ВЛАДОС.
- 10) Богданова Т.Г. (2002) Сурдопсихология. Академия.
- 11) Корсун С.В.・Гинзберг И.А. (2005) Азбука для неслышащего малыша. ОЛМА-ПРЕСС Звездный мир.
- 12) Крайнин В.А.・Крайника З.М. (1987) Человек не слышит.М ; (邦訳) 広瀬信雄 (1997) きこえない人ときこえる人. 新読書社.
- 13) Крылатов Ю. (1988) Азбука чутких не рук. Ленинград.
- 14) 坂庭淳史 (2003) 現代ロシアのジェスチャー. 東洋書店.
- 15) 千明弘美 (2002) 盲ろう者のコミュニケーション方法に関する研究ーロシア触指法の理論と実際ー. 山梨大学教育学研究科平成14年度修士論文 (未公刊).
- 16) 広瀬信雄 (1997) ラウ家と聴覚障害児教育. 山梨大学教育学部研究報告, 48, 250-257.